

大河下

シテ 河伯

ワキ 瀬波の領主勝間某

ワキツレ 里人

トモ 勝間の臣

所 周防瀬波川

「是は周防の國の住人。勝間の何某にて候。扱も此

國と申は。海浦の浪風あらふして。沙多く打揚磯山と成て。其後は浦風もたゞ候。去ば往昔は沿防と申候を。今は周防と改め候。又爰に瀬波川と申て大河の候。いつも大雨の折ふし水かさまさり。田畠損亡により。万民のなげき不便に存候間。土民共に申付瀬波川を切下し。海へ落し。耕作豊かななさばやと存候。いかに誰か有。シカぐ

ワキ
「皆々國中の者に瀬波川へ出よと申付候へ。

トモ
「畏て候。

ツレ、二人
「扱も領主の御ふれとて。國中の面々仰に隨ひ。上六十下八十五を限つて。鉗鍬やうの器物を手々に引さげ。我もくと瀬波川にこそ出にけれ。

「是はひとへに農業の。く。豊かにありてたなつもの。みのりの為ときくなれば。諫みをなして出にけり。く。

シテ「喃々あれ成人々。何とて其堤をば切おとし給ふぞ。

ワキ「さん候。此瀬波川の。海へも他国へも落す。たゞ

国を廻り。大雨の折ふしは水まさり。農事の障と

成候故。此堤を切。海へ水を落し候。

シテ「尤仰はさる事なれ共。昔より此河を他国へ落す事もなきに。今あらたに落さんとは。心得がたきいひ事哉。

ワキ「不思議やな。見れば童子の姿にて。堤を切をあら

そひいなむ。

詞「そも汝はいかなる者ぞ。

シテ「今は何をかつゝむべき。我は此川に年経て住る河伯士也。我独りのみに非ず。門葉広く数多眷属あり。代々を重て爰に住り。我いふ事を用ひずして。

堤をはなし水を落さば。人民にたゝりて命を取べし。かまへて堤を切開き。後悔すなと氣色をかへ。同「さもみやびたる童形の。く。其様はやく変じ

つゝ。面さながら沙丹塗の。軒の瓦の鬼と成。あたりを払ひ冷じき姿と成て。其儘河浪に入りけり。

河瀬の波に入りけり。 (中入)

ワキ

「ふしげや今の童形。顔色かはり鬼神と成て。堤を

制する有様也。然れ共かれは異形のなす業。殊に河伯が事なれば。何程の事か有べきなれども。若も此事さはりとならば。万民の悲しみも不便に候へば。当国一の宮玉祖の神に。祈誓かけばやと存

候。勝間の何某。急ぎ神前に参り膝まづき。幣とりあへず逆手をうつて頓首し。仰ぎ願はくば。此度瀬波河の水を難なく切くださしめ。国の農業を安穩に守らせ給へ。寸善尺魔の河伯がたりを。他方へ退けおはしませと。丹誠をこらす。南無帰命頂礼玉祖の神。

「斯て時刻も移るにて。國中の諸民数百人。鉏鋤大籠石どうつき。思ひくに用意して。曳声を出し

て瀬波川の。堤を切て水をくだす。実おびただしき有様かな。

同「あれく見よや瀬波川の。く。水上に河霧立くらがつて。渦浪をめぐらす其内より。化したる者のあまた顯れ。堤のあたりを取かこみ。いかれる姿に肝をけし。鉏鍬器物をなげ捨て。皆ちりぐに逃さりけり。

同「かゝりければふしぎやな。佐波の府中の玉祖の。

社頭の方より白雲立て。神火飛ちり神通の鏑の音冷じく。瀬波川の堤の方へぞ飛行する。

シテ

「其時河伯が眷属共。

同「其時河伯が眷属共。此神祟に恐れをなして。衆類を引つれ他方をさして退散すれば。人歩は悦び農具を以て。難なく堤を切ひらき。瀬波の大河を切くだし。耕作豊かに久堅の。天の玉祖威光を現じ。善哉々々と詔命して上らせ給へば。いよく国民に

ぎわひて。

く。

栄ふる御代とぞ成にけり。

底本… 国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂著
『宴曲十七帖 謡曲末百番』国書刊行会編